大江山

楠山正雄

一

むかし源頼光（みなもとのらいこう）という大将（たいしょう）がありました。その家来（けらい）に渡辺綱（わたなべのつな）、卜部季武（うらべのすえたけ）、碓井貞光（うすいのさだみつ）、坂田公時（さかたのきんとき）という四人（にん）の強（つよ）い武士（ぶし）がいました。これが名高（なだか）い、「頼光（らいこう）の四天王（てんのう）」でございます。

そのころ丹波（たんば）の大江山（おおえやま）に、酒呑童子（しゅてんどうじ）と呼（よ）ばれた恐（おそ）ろしい鬼（おに）が住（す）んでいて、毎日（まいにち）のように都（みやこ）の町（まち）へ出て来（き）ては、方々（ほうぼう）の家（いえ）の子供（こども）をさらって行きました。そしてさんざん自分（じぶん）のそばにおいて使（つか）って、用（よう）がなくなると食（た）べてしまいました。

するとある時（とき）、池田中納言（いけだのちゅうなごん）という人の一人（ひとり）きりのお姫（ひめ）さまが急（きゅう）に見（み）えなくなりました。中納言（ちゅうなごん）も奥方（おくがた）もびっくりして、死（し）ぬほど悲（かな）しがって、上手（じょうず）な占（うらな）い者（しゃ）にたのんでみてもらいますと、やはり大江山（おおえやま）の鬼（おに）に取（と）られたということがわかりました。

中納言（ちゅうなごん）はさっそく天子（てんし）さまの御所（ごしょ）へ上（あ）がって、大事（だいじ）な娘（むすめ）が大江山（おおえやま）の鬼（おに）に取（と）られたことをくわしく申（もう）し上（あ）げて、どうぞ一日（にち）もはやく鬼（おに）を退治（たいじ）して、世間（せけん）の親（おや）たちの難儀（なんぎ）をお救（すく）い下（くだ）さるようにとお願（ねが）い申（もう）し上（あ）げました。

天子（てんし）さまはたいそう気（き）の毒（どく）に思（おぼ）し召（め）して、

「だれか武士のうちに大江山の鬼を退治するものはないか。」

と大臣におたずねになりました。すると大臣は、

「それは源氏の大将頼光と、それについております四天王の侍どもにかぎります。」

と申し上げました。天子さまは、

「なるほど頼光ならば、必ず大江山の鬼を退治して来るに相違ない。」

とおっしゃって、頼光をお呼び出しになりました。

頼光は天子さまのおいいつけを伺いますと、すぐかしこまってうちへ帰りましたが、なにしろ相手は

人間と違って、変化自在な鬼のことですから、大ぜい武士を連れて行って、力ずくで勝とうとしても、鬼にうまく逃げられてしまってはそれまでです。なんでもこれは人数は少なくともよりぬきの強い武士ばかりで出かけて行って、力ずくよりは智恵で勝つ工夫をしなければなりません。こう思ったので、頼光は家来の四天王の外には、一ばん仲のいい友達の平井保昌だけをつれて行くことにしました。世間ではこの保昌のことを四天王に並べて、一人武者といっていました。

それからこれは人間の力だけには及ばない、神様のお力をもお借りしなければならないというので、

頼光と保昌は男山の八幡宮に、綱と公時は住吉の明神に、貞光と季武は熊野の権現におまいりをして、めでたい武運を祈りました。

さていよいよ大江山へ向けて立つことにきめると、頼光はじめ六人の武士はいずれも山伏の姿になって、頭に兜巾をかぶり、篠掛を着ました。そして鎧や兜は笈の中にかくして、背中に背負って、片手に金剛杖をつき、片手に珠数をもって、脚絆の上に草鞋をはき、だれの目にも山の中を修行して歩く山伏としか見えないような姿にいでたちました。

二

六人の武士はいくつとなくけわしい山を越えて大江山のふもとに着きました。たまたまきこりに会えば道を聞き聞き、鬼の岩屋のあるという千丈ガ岳を一すじに目ざして、谷をわたり、峰を伝わって、奥へ奥へとたどって行きました。

だんだん深く入って行って、まっくらな林の中の、岩ばかりのでこぼこした道をよじて行きますと、やがて大きな岩室の前に出ました。その中に小さな小屋をつくって、三人のおじいさんが住んでいました。頼光

はこんな山奥で不思議だと思って、これも鬼の化けたのではないかと油断のない目で見ていますと、おじいさんたちはその様子を覚ったとみえて、にこにこしながら、ていねいに頭を下げて、

「わたくしどもは決して変化でも、鬼の化けたのでもありません。一人は摂津の国から、一人は紀伊の国から、一人は京都に近い山城の国から来たものです。あの山の奥に住む酒呑童子のために妻や子を取られて残念でたまりません。どうかして敵を取りたいと思って、ここまで上っては来ましたが、わたくしどもの力ではどうすることもできませんから、ここにこ

うしてあなた方のおいでを待ちうけていました。山伏の姿にやつしてはおいでになりますが、あなた方はきっと酒呑童子を退治するために、京都からお下りになった方々でしょう。さあ、これからわたくしどもがこの山の御案内をいたしますから、どうぞあの鬼を退治して、わたくしどもの敵をいっしょに討っていただきとうございます。」

といいました。

頼光はそれを聞いてやっと安心しました。そしてしばらく小屋の中に入って足の疲れをやすめました。その時三人のおじいさんは、

「あの鬼はたいそうお酒が好きで、名前まで酒呑童子といっております。好物のお酒を飲んで、酔い倒れますと、もう体が利かなくなって、化けることも、にげることもできなくなります。わたくしどものこのお酒は、「神の方便鬼の毒酒」という不思議なお酒で、人間が飲めば体が軽くなって力がましますが、鬼が飲めば体がしびれて、通力がなくなってしまって、切られても、つかれても、どうすることもできません。このお酒をあげますから、酒呑童子にすすめて酔いつぶした上、首尾よく鬼の首を切って下さい。」

といって、お酒のかめをわたしました。

それから三人のおじいさんは先に立って、千丈ガ岳を上って行きました。十丈くらい長さのある、まっくらな岩穴の中をくぐって外へ出ますと、さあさあと音を立てて、小さな谷川の流れている所へ出ました。その時おじいさんたちはふり向いて、

「ではこの川についてどんどん上っておいでなさい。すると川のふちに十七八の娘がいますから、その子にたずねて、鬼の岩屋へおいでなさい。」

といったと思うと、三人ともふいと姿が見えなくなりました。

みんなはあの三人のおじいさんは、住吉の明神さ

まと、熊野の権現さまと、男山の八幡さまが仮に姿をお現しになったものであることをはじめて知って、不思議に思いながら、後ろから手を合わせておがみました。そしてこの通り神さまのあらたかな加護のある上は、もう鬼を退治したも同然だと心強く思いました。

そこで教わったとおり川についてどこまでも上って行きますと、十七八のきれいな娘が、川のふちで血のついた着物を洗いながら、しくしく泣いていました。

頼光はそのそばへ寄って、

「あなたはだれです。どうしてこんな山の中に一人でいるのです。」

と聞きました。娘はまたぽろぽろと涙をこぼしながら、

「わたくしは都から、ある晩鬼にさらわれてこの山の中に来たのでございます。おとうさまやおかあさまや、ばあやたちはどうしているでしょう。その人たちにも二度と会うこともできない身の上になりました。」

といいました。そして、

「あなた方はいったいどうしてこんなところへいらしったのです。ここは鬼の岩屋で、これまでよそから人間の来たことはありません。」

といいました。頼光は、そこで、

「いや、わたしたちは天子さまのおいいつけで、鬼を退治に来たのだから、安心しておいでなさい。」

といいきかせますと、娘はたいそうよろこんで、

「それではこの川をまたずんずん上っておいでになりますと、鉄の門があって、門の両脇に黒鬼と赤鬼が番をしています。門の中にはるりの御殿があって、その庭には春と夏と秋と冬の景色がいっぱいにつくってあります。しゅてんどうじはその御殿の中で、夜昼お酒を飲んで、わたくしどもに歌を歌ったり、踊りを踊らせたり、手足をさすらせたりして、あきるとつかまえて、むごたらしく生き血を吸って、骨と皮ばかりにし

て捨ててしまいます。このとおり今日も、ころされたお友達の血のついた着物をこうして洗っているのです。」

といいました。

頼光は娘を慰めて、教えられたとおり行きますと、なるほど大きないかめしい鉄の門が向こうに見えて、黒鬼と赤鬼が番をしていました。門に近くなると頼光たちは、わざとくたびれきったように足をひきずってあるきながら、こちらから鬼に声をかけて、

「もしもし、旅の者でございますが、山道に迷って、もう疲れて一足も歩かれません。どうぞお情けに、し

ばらくわたくしどもを休ませていただきとうございます。」

と、さも心細そうにいいました。

鬼どもは、

「これは珍しい者がやって来たぞ。なにしろ大王様に申し上げよう。」

といって、酒呑童子の所へ行ってしらせますと、

「それはおもしろい。すぐ奥へとおせ。」

といいました。

六人の武士が縁側に上がって待っていますと、やがて雷や稲光がしきりに起こって、大風のうなるよ

うな音がしはじめました。するとまもなくそこへ、一丈にもあまろうという大きな赤鬼が、髪の毛を逆立てて、お皿のような目をぎょろぎょろさせながら出て来ました。その姿を一目見ただけで、だれだっておどろいて気を失わずにはいられません。けれども頼光はじめ六人の武士はびくともしないで、酒呑童子の顔をじっと見返して、ていねいにあいさつをしました。童子はその時おうへいな調子で、

「きさまたちはいったいどこから来た。よくこんな山奥まで上がって来たものだな。」

といいました。

すると頼光が、

「それはわたくしども山伏のならいで、道のない山奥までも踏み分けて修行をいたします。わたくしどもはいったい出羽の羽黒山から出ました山伏でございますが、この間は大和の大峰におこもりをしまして、それから都へ出ようとする途中道に迷って、このとおりこちらの御厄介になることになりました。」

といいました。酒呑童子はそう聞いて、すっかり安心しました。

「それは気の毒なことだ。まあ、ゆっくり休んで、酒でも飲んで行くがいい。」

こういうと頼光も、

「それはごちそうです。失礼ではございますが、わたくしどももちょうど酒を持ってまいりましたから、この方も飲んで頂きたいものです。」

といいました。

「それはありがたい。それでは酒盛りをはじめようか。」

童子はこういって、大ぜいの腰元や家来にいいつけて、酒さかなを運ばせました。酒呑童子はそれでもまだ油断なく、六人の山伏を試してみるつもりで、

「それではまず客人たちに、わたしの勧める酒を飲

んでもらって、それからこんどはわたしがごちそうになることにしよう。」

といって、酒呑童子は大きな杯になみなみ人間の生き血を絞って入れて、

「さあ、この酒を飲め。」

といって、頼光にさしました。頼光は困った顔もしないで、一息に飲みほしてしまいました。それから保昌、次は綱と、かわるがわる次から次へ杯をまわして、おしまいに酒呑童子に返しました。

「酒ばかりではさびしい。さかなも食え。」

酒呑童子はこういって、こんどは生ま生ましい人間

の肉を出しました。頼光たちはその肉を切って、さもうまそうに舌鼓をうちながら食べました。酒呑童子は頼光たちが悪びれもしないで、生き血のお酒でも、生ま肉のおさかなでも、引き受けてくれたので、見るから上機嫌になって、

「こんどはお前たちの持って来た酒のごちそうになろうじゃないか。」

といいました。頼光はさっそく綱にいいつけて、さっき神様から頂いた「神の方便鬼の毒酒」を出して、酒呑童子の大杯になみなみとつぎました。酒呑童子は一息に飲みほして、これもさもうまそうに舌鼓を

うちながら、

「これはうまい酒（さけ）だ。もう一ぱいくれ。」

と杯（さかずき）を出（だ）しました。頼光（らいこう）は心（こころ）の中ではしめたと思（おも）いながら、うわべは何気（なにげ）ない顔（かお）をして、

「どうもお口にかなって満足（まんぞく）です。それではお酒（さけ）だけではおさびしいでしょうから、こんどはおさかなをいたしましょう。」

といって、立（た）ち上（あ）がって、扇（おうぎ）をつかいながら舞（ま）いを舞（ま）いました。四天王（てんのう）は声（こえ）を合（あ）わせて拍子（ひょうし）をとりながら、節（ふし）おもしろく歌（うた）を歌（うた）いました。

それを見（み）ると、酒呑童子（しゅてんどうじ）も、手下（てした）の鬼（おに）たちも、おも

しろそうに笑(わら)いながら、すすめられるままに、「神(かみ)の方便鬼(ほうべんおに)の毒酒(どくざけ)」をぐいぐい引(ひ)き受(う)けて、いくらでも飲(の)みました。そのうちにだんだんお酒(さけ)のききめが現(あらわ)れてきて、酒呑童子(しゅてんどうじ)はじめ鬼(おに)どもは、みんなごろごろ酔(よ)い倒(たお)れて、正体(しょうたい)がなくなってしまいました。

頼光(らいこう)たちは鬼(おに)のすっかり倒(たお)れたところを見(み)すましますと、笈(おい)の中から鎧(よろい)や兜(かぶと)を出(だ)して、しっかり着(き)こみました。そして六人(にん)一度(ど)に刀(かたな)をぬいて、酒呑童子(しゅてんどうじ)の寝(ね)ている座敷(ざしき)にとびこみますと、酒呑童子(しゅてんどうじ)はまるで手足を四方(しほう)から鉄(てつ)の鎖(くさり)でかたくつながれているように、いくじなく寝込(ねこ)んでいました。頼光(らいこう)はすぐ刀(かたな)をふり

上(あ)げて酒呑童子(しゅてんどうじ)の大きな首(くび)をごろりと打(う)ち落(お)としてしまいました。酒呑童子(しゅてんどうじ)の手足はそのまま動(うご)けなくなりましたが、切(き)られた首(くび)だけは目をさまして、すっと空(そら)に飛(と)び上(あ)がりました。そしていきなり頼光(らいこう)をめがけてかみついて来(こ)ようとしました。けれども兜(かぶと)の前立(まえだて)のきらきらする星(ほし)の光(ひかり)におじけて、ただ口から火を吹(ふ)くばかりで、そばへ近寄(ちかよ)ることができません。そのうち頼光(らいこう)に二三度(ど)つづけて切(き)りつけられて、首(くび)はどんと下におちてしまいました。

手下(てした)の鬼(おに)どもは、しばらくの間(あいだ)はてんでんに鉄棒(てつぼう)をふるって、打(う)ちかかってきましたが、六人(にん)の武士(ぶし)に

片端(かたはし)から切(き)り立(た)てられて、みんな殺(ころ)されてしまいました。

鬼(おに)が大(おお)ぜいつかまえておいた娘(むすめ)たちの中には、池田(いけだ)の中納言(ちゅうなごん)のお姫(ひめ)さまも交(ま)じっていました。頼光(らいこう)は鬼(おに)のかすめた宝物(たからもの)といっしょに娘(むすめ)たちをつれて、めでたく都(みやこ)へ帰(かえ)りました。天子(てんし)さまはたいそうおよろこびになって、頼光(らいこう)はじめ保昌(ほうしょう)や四天王(してんのう)たちにたくさん御褒美(ごほうび)を下(くだ)さいました。そしてそれからは鬼(おに)が出て人をさらう心配(しんぱい)がなくなりましたから、京都(きょうと)の人たちはたいそうよろこんで、いつまでも頼光(らいこう)や四天王(してんのう)たちの手柄(てがら)を語(かた)り伝(つた)えました。

底本：「日本の英雄伝説」講談社学術文庫、講談社
１９８３（昭和58）年６月10日第１刷発行
※「千丈（せんじょう）ガ岳（たけ）」の「ガ」は底本では小書き。
入力：鈴木厚司
校正：大久保ゆう
２００３年９月29日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。